



正解だけが答えじゃない

園長 野中 泉

7月後半から8月にかけて、アトムは文字通りコロナ第7波の渦の中にいました。姉妹園のつばさ共同保育園のメンバーと合同でつくっているコロナ対策チームのグループラインは、朝も晩も休日も通知音が鳴り続け、園児と職員の濃厚接触者と陽性者を記録しているカレンダーは、待機期間を示す黄色とピンクのマーカーですき間なく塗りつぶされました。

その喧騒のなか、国や自治体、保健所の対応も、1週間単位で変わり続けました。濃厚接触者の待機期間の日数、濃厚接触者の特定の定義、クラス閉鎖の基準など。コロナとつき合い続けた経験から納得できる規制緩和もある反面、いちいち保健所や管轄課の指示を仰がんといてくれ、それぞれの施設が自分のところの責任で対応してくださいよと、ますます園に丸投げされたような感も否定できず、よけいに頭を悩ませることにもなりました。

ひとりでも陽性者が出たら強制的に閉園ではなくなって、園長である私は「どうすればいい？」と、職員からも保護者からも尋ねられる場面が増えました。「濃厚接触者と陽性者が多くてひとりでも職員が休んだら、明日は体制がまわりません。どうしましょう？」「お父さんが発熱だって日報に書いてあった。子どもは帰ってもらわなくていい？」「病院にいったも、検査してくれなかった。検査結果が出ないと登園できないですよね？」「高熱の上の子を病院に連れていく間、下の子を見てくれる人がいないと相談されたけど、どうしよう？」などなど。今、ゆっくり考えても正解はわからない問題に時間制限のある中で、次々に答えを出さなければいけない。時には、判断をめぐって保護者と言い争いになってしまう場面もありました。

でも、とにかく、仲間と何度も言い合ったのは、誠実に正直に、今考えられるベストを尽くそうということです。この間のアトムの状況や都度の園の判断は、それぞれ隠さずオンタイムで保護者のみなさんにもお伝えしてきたので、今改めてお伝えすることも無いのですが、職員同士は、もう一歩踏み込んで正直な関係を大事にしてきました。

職員内の連絡網で、職員の濃厚接触者や陽性者の情報を流すときには、正規職員もパートさんも、個人の名前を覚えて載せました。例えば「〇〇さん、息子さん陽性で、5日間休みます。△△組の体制助けてあげてね」とか「△△さん、家族みんな陽性です。◎日まで待機期間のびました。よろしくお願いします」というように。コロナの出始め頃には、憶測からの誹謗中傷が確かにあり、国や自治体からは個人情報取り扱いには厳しく指導がありました。実際、今も閉園やクラス閉鎖に至らない情報は、詳しく保護者に伝えなくてもよいと指導されていますし、ましてや、職員といえども個人名をそのまま共有している園は、熊取町内ではうちとつばさだけでしょう。でも、病気になった人やその家族を隠さないといけない社会も、病気になった仲間に「大丈夫？手伝えることはない？」と声をかけられない職場も、やっぱりおかしいと思うのです。何より、アトムで働くひとりひとりが、そのことをしっかりお腹に落としていないと、陽性になった園児や保護者にきちんと寄り添えないとも考えています。

8月の終わりに開いたパート会議で、陽性から復帰した職員がこんなことを言いました。「最初、自分の名前がさくら連絡で流れてきたときには、申し訳なくて、どうしようと心配になった。でも、仕事復帰した日に、職員さんたちみんなが、おかえり、おかえり～、大変やったね。待ってたよと声をかけてくれて、やっぱり、アトムはあったかいなと涙が出ました」。

7月の終わりに、職員と園児の陽性者が相次ぎ、もう万策尽きて休園を決めざるを得なかったときには、「仕事休まないといけないのに、迷惑かけてごめんね」と謝った私に、迎えに来た保護者の何人もが「苦しいのは、どの職場も一緒、お互い様だよ」「踏ん張ってきた保育士さんたちが休めることで、かえてホッとした」「どんな、判断も応援してるから、謝らないで」と逆に励ましてくれて、胸がいっぱいにもなりました。

正解だけが、答えじゃない。目の前にある「苦しさ」をちゃんと表に出して共有する仲間（保護者と職員と）がいて、苦しいけど一緒に越えていこうと当たり前のように声をかけあえる毎日があるから、アトムは支えられている。そう実感しています。